明治学院大学図書館付属
遠山一行記念
日本近代音楽館
TOYAMA Kazuyuki Memorial Archives
of
Modern Japanese Music
館報（第6号）

目次

音楽館の近況
第五回レクチャーコンサート報告
第六回レクチャーコンサート「前衛の種子たち―〈グループ・音楽〉の日々―」を開催
夏の日々――今年、二〇一七年の夏の音楽体験から――
浅草オペラ―一〇〇年の回想
〈コラム 著作権あれこれ㊦〉
資料受入報告
日誌から
編集後記

音楽館の近況

●ホームページのリニューアルと館報デジタル版公開

二〇一一年度に開設したホームページ（http://www.meijigakuin.ac.jp/library/amjm/）をリニューアル、六月一日から公開している。リニューアルの主要な目的は情報提供サーヴィスの利便性を高めることで、メニューに「資料検索」と「出版物」が加えられた。

「資料検索」には、館内限定公開だった音楽館のＯＰＡＣ（オンライン蔵書目録）と、所蔵雑誌一覧が含まれている。ＯＰＡＣのデータは、現在、出版物（書籍、楽譜、ＣＤ）に限られるが、ＯＰＡＣに搭載されていない資料についても、可能な範囲で代行検索を行うので、電話、ファックスでご連絡いただきたい。所蔵雑誌一覧には、ＣｉＮｉｉ（ＮＩＩ学術情報ナビゲータ）登録データに加えて、マイクロフィルム、マイクロフィッシュ、電子複写による複製資料の所蔵データも掲載されている。データ更新は年二回程度の予定。

「出版物」では、当館出版物（館報、展覧会『五線譜に描いた夢―日本近代音楽の一五〇年』図録（二〇一三）と、遠山音楽財団付属図書館編・発行『山田耕筰作品資料目録』（一九八四　第三回中島健蔵音楽賞受賞）についてご案内している。

ホームページのリニューアルにあわせて、館報バックナンバーのデジタル版を制作し、ホームページ内「出版物」館報のページからアクセスできるようになった。あわせてご利用いただきたい。

●国際音楽資料情報協会（ＩＡＭＬ）日本支部例会

六月三日、東京音楽大学において、国際音楽資料情報協会（ＩＡＭＬ）日本支部二〇一七年度総会と第六二回例会が開催された。今回の例会テーマは「公演資料の収集と整理～演奏会プログラムのデータベース構築に向けて」。基調報告「音楽資源としての演奏会プログラム」（林淑姫氏　ＩＡＭＬ日本支部）とシンポジウムで構成され、シンポジウムには、児玉竜一（早稲田大学坪内博士記念演劇博物館）、遠藤淑恵、永井靖子（東京文化会館音楽資料室）、鳥海恵司（株式会社トッカータ）の各氏と、当館から森本美恵子が出席、一般に図書館資料として扱われることの少ない公演資料収集の重要性と整理の方法について討議された。ＩＡＭＬ日本支部においても、このテーマへの取組みは初めてで、将来を見据えた意義あるシンポジウムとして注目を集めた。

パネリストの事例報告は左記の通り。

・児玉竜一　近世芝居番付、近代演劇上演プログラム等の収集とデータベース構築
・遠藤淑恵／永井靖子　東京文化会館におけるプログラム収集
・森本美恵子　公演資料の収集と整理～日本近代音楽館の場合
・鳥海恵司　公演資料の目録作成（試案）

この例会の記録は『国際音楽資料情報協会日本支部Newsletter』六一号（印刷版、電子版）に掲載される予定。

●音楽図書館協議会総会

六月二三日、東京音楽大学において、音楽図書館協議会二〇一七年度総会が開催された。議事は二〇一六年度活動報告と決算報告・監査報告、二〇一七年度活動計画（案）と予算（案）で、事務局提案どおり承認された。

今年度の特筆すべき事業は、『日本の音楽図書館―音楽図書館協議会40年のあゆみ』の刊行で、長期にわたる困難な編集作業を終え、一二月にも上梓の運びとなった。第一部　日本の音楽図書館、第二部　音楽図書館協議会の事業、資料編から成る。

【出版データ】音楽図書館協議会編・発行『日本の音楽図書館―音楽図書館協議会40年のあゆみ』大空社出版発売　菊判　三二〇ページ　ISBN 978-4-900266-09-4　予価六二〇〇円（税別）。

第五回レクチャーコンサート報告

昨年一一月二三日(水曜日)、本学白金キャンパスアートホールで、日本近代音楽館レクチャーコンサートシリーズⅤ「浅草オペラ―100年の回想」が開催された。

倉田喜弘氏

今回のレクチャーコンサートは、およそ百年前、一世を風靡した浅草オペラを取り上げ、社会学的見地から見直そうというもの。第一部は芸能史研究の第一人者、倉田喜弘氏のお話、第二部はオペレッタ座の黒田晋也(T)、小林晴美(S)、山中聡子(pf)の各氏による、衣裳演技付ミニ公演。日本のオペラ史とは別の切り口から論じられた興味深いお話とユーモア溢れる舞台上演に、満席となった会場は温かい拍手に包まれた。演奏曲目は左記のとおり。

・「恋はやさしい野辺の花よ」「桶屋の歌」「バラを召しませ」「真実はこの世に一つだけ」(ボッカチオ)
・「コロッケーの唄」「おてくさん」(カフェーの夜)
・「朝の歌」(茶目子の一日)
・「波をけり」(コルヌビルの鐘)
・「御寺の壁に」(アルカンタラの医者)
・「岩にもたれた」(フラ・ディアボロ)
・「大将閣下の名はブンブン」(ブン大将)
・「恋に悩む私」(天国と地獄)
・「〈ボッカチオ〉メドレー」(pf)
・「ダブリン湾の歌」「チッペラリーの歌」(女軍出征)
・「庭の千草」
・「女心(女心の歌)」(リゴレット)
・「間奏曲」「ハバネラの歌」「闘牛士の歌」(カルメン)
・「乾杯の歌」(椿姫)
・同時代の中山晋平作品「カチューシャの歌」「恋の鳥〜酒場の唄〜煙草のめのめ」(〈カルメン〉より)「ゴンドラの歌」「波浮の港」「シャボン玉〜証城寺の狸囃子」、

また、当館所蔵資料から、演奏とともに当時の写真などを映写し、会場内で、セノオ楽譜や浅草オペラ関係書籍を展示した。【後面に抄録掲載】

小林晴美氏（左）と黒田晋也氏（右）

合唱はオペレッタ座メンバー

第六回レクチャーコンサート

「前衛の種子たち―〈グループ・音楽〉の日々」を開催

一一月一一日（土曜日）、本学白金キャンパス アートホールにおいて、音楽評論家佐野光司氏、作曲家水野修孝、塩見允枝子、一柳慧の各氏を迎えて音楽館レクチャーコンサートシリーズ Ⅵ「前衛の種子たち―〈グループ・音楽〉の日々」を開催する。今回のレクチャーコンサートは、基調講演と座談会（当時の音源再生を含む）で構成され、五〇余年前の「前衛の種子」が、現代に投げかける意味を再考する。

◎講演趣旨

一九五〇年代の終わり頃、日本の現代音楽の最前衛は、「軽井沢現代音楽祭」（五七―五九）に集約されるように、セリー音楽だった。ジョン・ケージの名前は知られていたが、彼の音楽の内容・意味は全く知られていなかった。

「グループ・音楽」のメンバーが自分たちの即興音楽を開始したのは、一九五八年からだ。つまりセリー音楽が最前衛だった時代に、六〇年代を支配する不確定性の音楽（当時はまだこの言葉は普及していなかった）を始めていたのだ。

水野修孝、小杉武久たちが目指したのは、一口に云えば「生きている音を楽譜の中に閉じ込めない」というものだったと思う。そうした思考は、ケージが早くから持っていたが、彼等はケージの思考を知る前に日本で始めたのだ。「グループ・音楽」第一回演奏会は一九六一年、ケージ来日の前年である。彼等は集団で即興演奏を試み、そこから各々の道を見出していったが、集団による即興演奏がヨーロッパで話題にされたのはシュトックハウゼンの《七つの日より》（一九六八）からだ。「グループ・音楽」が如何に時代に先行していたかが分かろう。（佐野光司）

出演
基調講演　佐野光司（音楽評論家）
座談会　水野修孝（作曲家）
塩見允枝子（作曲家）
一柳慧（作曲家）
佐野光司（司会）
曲目　「オートマティズム」（一九六〇　録音再生）ほか
日時　一一月一一日（土）　一四時開演
会場　明治学院大学白金キャンパス アートホール
主催　遠山一行記念日本近代音楽館
＊入場無料　要予約（東京コンサーツ　03・3200・9755）

仕事の周辺

夏の日々

――今年、二〇一七年の夏の音楽体験から――

西村朗

六月中旬、現代音楽界のスーパースターとも評される弦楽四重奏団、アルディッティ・カルテットが来日し、二週間にわたって東京・大阪などで演奏を行った。アルディッティ・カルテットに捧げた拙作「弦楽四重奏曲第六番〈朱雀〉」の初演もなされ、レコーディングも行われた。出会って三〇年、幸福なことに自分の全ての弦楽四重奏曲は彼らによって世に送り出してもらっている。現代音楽界の最先端をひた走るクリエイティブな表現者である彼らから得てきたもの、学んだことは多く、私の大切な宝である。

レコーディング（CD：カメラータ）を行った相模湖畔のホール。リーダーのアーヴィン・アルディッティやメンバーと眺めた湖面の輝きが印象的だった。

七月一五日（土）、大阪のいずみホールで「いずみシンフォニエッタ大阪（ISO）」の第三九回定期演奏会があった。ISOは、いずみホールのレジデント・オーケストラとして二〇〇〇年に設立され、音楽監督を拝命。以来、企画・監修を務めている。今回は「超

絶のコンチェルト〜めくるめく競演〜」と題し、ユン・イサンの「クラリネット協奏曲」（独奏：上田希）、ジョン・ウイリアムズ「オーボエ協奏曲」（独奏：古部賢一）、グルーバー「フランケンシュタイン!!」（バリトン：宮本益光）と、松本直祐樹氏への委嘱新作「トロンボーン協奏曲」（世界初演／独奏：呉信一）という曲目。名匠下野竜也氏の指揮。どれも非常な熱演で、聴きごたえがあった。

大阪出身の私も設立に関係したＩＳＯの基準編成は二五名程度。関西ゆかりの第一線ソリスト・クラスの名手を揃えている。常任指揮者は飯森範親氏でコンサートマスターは小栗まち絵さん。現代音楽が主たるレパートリー。プログラム・アドバイザーに驚異的な博識者である川島素晴氏を擁している。現在は年二回の公演。プログラム選定からして大変難しいが、非常なやりがいを感じている。

八月四日（金）〜七日（月）は、「合唱音楽の新たな地平／八ヶ岳ミュージック・セミナー川上村」に実行委員として参加。合唱指揮者栗山文昭氏が中心になってのセミナーで、一九九九年にスタート。私も言い出しっぺの一人で、とにかく合唱界の意欲ある指導者とチャレンジングな作曲家が、山にでもこもって一種特異に肥大化した日本の合唱音楽界を見つめ直し、なにか思い切ったことを考え、未来への戦略を探ろうということで始動した。当初は山ではなく、なんと島根県沖の遥かな日本海上、隠岐で催し、四年続けた後、今の長野県川上村に落ち着いた。毎年、六〇〜七〇名程度の参加者が委嘱新作合唱曲を作曲者自身の指導・指揮で歌い、テーマを定めたシンポジュームを開催している。時々、めちゃくちゃに新鮮な新作が登場する。たとえば、三輪眞弘氏の「またりさまＣＰＵ」。それは、きわめて精度の低い人間コンピュータ合唱のアルゴリズム演奏の儀式的作品だった。今年もゲスト作曲者は新鮮、茂木眞理子さんと日野原秀彦氏が面白い新作を提供してくれた。セミナーの帰路、台風の直撃を受け、ＪＲ中央線も中央道も不通となり、茂木さんのご主人運転のレンタカーで日野原氏ともども大渋滞の一般道へ。東京の自宅帰着は午前三時半。へとへとになった。

八月一七日（木）〜三〇（水）は「草津夏期国際音楽アカデミー&フェスティヴァル」に参加。一九八〇年に第一回が催され、今年で第三八回となったこの音楽祭は、日本で最も歴史ある音楽祭のひとつ。音楽祭を長年にわたって育んでこられた音楽監督遠山一行先生のご指名を受けて、二〇一〇年から私が後任の音楽監督をつとめさせていただいている。辣腕のプロデューサー井阪紘氏に支えられて。

期間中、毎朝九時からの三時間はアカデミー。一五カ所ほどのセミナーハウスでのマスター・クラス。今年の講師は、ソプラノのジェンマ・ベルタニョッリ。ピアノのアントニー・シピリ、岡田博美、クリストファー・ヒンターフーバー。ヴァイオリンのサシコ・ガヴリロフ、ウェルナー・ヒンク、マルクス・ヴォルフ、パオロ・フランチェスキーニ。ヴィオラのロベルト・バウアーシュタッター。チェロのタマーシュ・ヴァルガ。フルートのカール＝ハインツ・シュッ

ツ。オーボエのトーマス・インデアミューレ。クラリネットの四戸世紀。ホルンのカテジナ・ヤヴールコヴァー。オルガン&チェンバロのクラウディオ・ブリッィ。そしてチェコの名門パノハ弦楽四重奏団といった面々。錚々たる顔ぶれ。アカデミーに力を注いでいるのが草津の伝統的な特色。私の役目のひとつはマスター・クラスの巡回。

夕方四時からは連日コンサート。毎年、草津音楽祭ならではのプログラムを考えている。今年の主役はモーツァルトだが、その重要な友人ミヒャエル・ハイドンの作なども。知られざる名作や、現代作品も積極的に取り上げている。

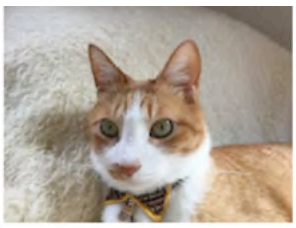
講師の教授陣を中心とした入魂の演奏が連日続く。

音楽祭の後半には、今年も天皇皇后両陛下の行幸啓を賜った。

草津の有名な温泉湯畑の近くに、由緒ある「草津聖バルナバ教会」がある。思うところ、感じるところあってこの教会のオルガンのために、今回の草津滞在中、小品「ファンタジア」を作曲。ブリッィ教授にその教会で初演していただいた。忘れ難い思い出となった。

八月三一日、帰京。東京もすでに秋の気配だった。秋から春にかけては作曲に没頭することになる。

毎年、夏はこんなように過ごしている。



西村ペトロ（牡8歳茶トラ白）

余談ながら、標高一二〇〇メートルの避暑地でもある草津には、我が家の猫ペトロも同行している。

（にしむら・あきら　館収書委員　作曲家）

浅草オペラ―一〇〇年の回想

―第五回レクチャーコンサート抄録―

倉田喜弘

今日は、今から百年ほど前に話題になった浅草のオペラついてお話をさせて頂きます。

まず最初に、日本はオペラをどう扱ってきたのか、ということから始めます。

私は大阪の生まれなので、最初、オペラは大阪の俄（にわか）と同じようなものではないか、と思っていました。俄は、一人の人間（役者）が浄瑠璃を語りながら演技をします。これには節もついていますし、科白を言って芝居もする、踊る人間（その人の場合もあれば、他の人の場合もある）もいます。つまり、一人ないしは複数の人がお互い唄い合って科白を言って踊るのです。

ところが、東京に来て、参った、と思うことがありました。一九六一年、上野に東京文化会館ができあがり、柿葺落（こけらおとし）にイタリア・オペラが上演されたのですが、その時のマリオ・デル＝モナコ、私は人間の体からこんな声が出るのか、ととても驚きました。また、シミオナートの、喉の奥でコロコロ声をころがすテクニック（アジリタ）を聴き、これは日本の芸能にはない、俄ではこんなことはやれっこない、と見直しました。

それから二、三年経って、一九六三年、お濠端に日生劇場ができました。ここに最初に呼ばれたのはベルリン・ドイツ・オペラです。柿葺落はやっぱりオペラ。

さらに十年ぐらい後、一九七二年にＮＨＫホールができあがりました（七三年開館）。幕開けには先程も申しあげたイタ・オペが招待されました。

新しい劇場ができた時、一番最初にオペラをもってくるのが日本の興行者の、あるいは音楽愛好者の間のひとつの決まったパターンだったのです。

では、今から七〇年前、あるいは百年前はどうだったのでしょうか。オペラが上演できそうな劇場、帝国劇場は、明治四四年に開場しました。その二年ほど前、島村抱月の投書が新聞に載ります。曰く、近く帝劇ができるが、その時に、自分がヨーロッパに留学していた時のドイツのオペラ（ワーグナー）を招待してほしい、帝劇に期待している（「帝国劇場当事者の一考を煩はす」『読売新聞』明治四三年四月三日）。柿葺落には日本にない素晴らしい芸能を呼びたい、という気持ちを感じますね。それは翌年、帝劇側に、「経済的にいつて到底出来ない相談」（西野恵之介「今後の劇場と女優」『読売新聞』明治四四年一月七日）と言われてしまいますが。

その帝劇が、明治四五年に「熊野（ゆや）」という作品を上演します。帝劇の一等席のお客さんはかなりハイソサエティで、当時の日本人の好みからいえば、全員と言っていいほど謡をマスターしています。みんな「熊野」を知っています。これがそのままオペラになったので、大変な騒動がおこりました。帝劇の初日は二月二日ですが、二月三日付で、まず『読売新聞』がこんなことを書きます。「環女史の熊野が讃美歌のやうな歌を唄ふので観客は先づ笑声を発する」「清水氏の宗盛其他がゾロゾロ出て来て同じく讃美歌を初める」「環女史が変な手付で踊る従者や侍女がその周囲を太鼓に合して天理教のやうな歌を唱ふ」（「二人ノラと珍劇　帝国劇場の初日」）。それから二、三日後の『時事新報』、「此一幕「失敗」といふ語を以て評尽すべし…」（「帝国劇場評判 下」二月六日）。ところが二月の末、高村光太郎のこんな記事が『読売新聞』に出ました。「「熊野」に対する世人の嘲笑の甚だ無法なものである事を感じた」。「即ち舞台の上に立つてゐる人々を、同じく芸術に係はつてゐる身として気の毒に思はないではゐられなかつた」（「「熊野」と公衆」二月二十日）。このプランナーは、洋風管弦楽で「熊野」を表現しようと考えているのに、お客は、緋の袴とヴァイオリン、短冊とソプラノが合わない、と笑っている。でも、「公衆は今自己の嘲笑してゐる管弦楽の歌劇といふものに何時か媚びる日が来るのを思はなくてはならない」。

この時、全く違う発想をする人がいました。東宝の創業者、阪急電鉄を経営する小林一三です。宝塚へ路線を延ばすため、人様に来ていただけるような催しものはないか、探していたというのです。たまたまこの「熊野」を観たところ、一階席はみんな笑いこけているのに、ふと見たら、三階席に学生が屯しているので上がってみた。「僕はそこへ行って、「あなた方、これがおもしろいのですか」と、聞くと、『三浦さんはこうだ、清水金太郎はこうだ』と、批評する」「それは音楽学校の生徒であった。私には音楽学校でそういうものを習っているな、ということがわかった。オペラの将来が洋々と展けていることを知った」（『宝塚漫筆』）。大半の人が笑っている中で、一人、よし、これで商売をしよう、あるいは、新しい文化を創ろう、と考えていた人がいたわけです。

また、小林一三はこんな話を残しています。「女の子は、膝から上はどんなことがあっても出さない。もっとパっとまくって足を見せなくてはいかんといっても、―略―いうことを聞かない。それで非常に困ったのを今も憶えている」（前掲書）。女の子たちは十五歳前後でしょう。全員着物で育ってきました。ですから、着物を脱いで洋服を着ても、膝までしか上げないんです。あのラインダンスはできませんよね。これは大きな問題です。

いよいよ浅草オペラの話に入ります。

【図1】浅草公園（『浅草六区』一九八七

【図1】をご覧ください。浅草にはたくさんの小屋がありました。黒く塗られているところは瓢箪池で、その左上は凌雲閣です。関東大震災でかなり傷み、十二年の終わりに陸軍の工兵隊が爆破しましたから、大正十三年にはもうありません。凌雲閣からちょっと下りたところの「キネマクラブ」、ここでは一回だけオペラが行われました。次のコーナー、左、「観音劇場」。道を越して右側、「三友館」、これは子供オペラを演っていたところです。次のコーナー、「帝国館」、これは松竹系の大きな映画館です。千五百人入ります。その隣の「松竹館」、こちらは千人入ります。その下、「日本館」、これがオペラの常打ち小屋。次、「東京クラブ」「常盤座」「金龍館」。「東京クラブ」ではオペラは演っておりません。「常盤座」では演ります。「金龍館」はオペラの常打ち小屋です。

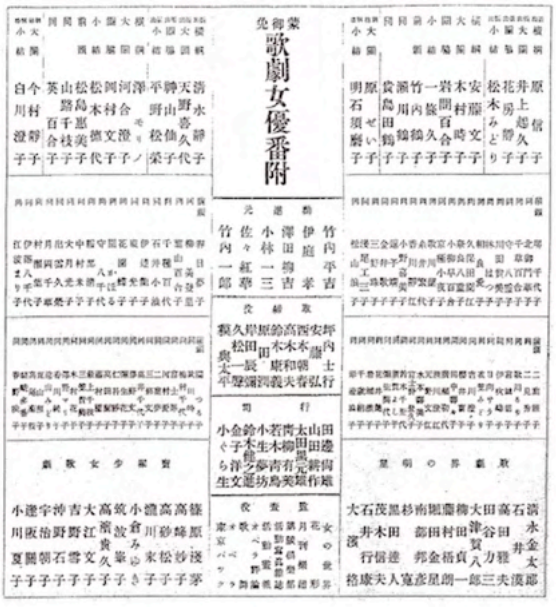
三
高木徳子
歌舞劇 女軍出征 全幕
高木徳子、伊庭孝、滝モリノを初め二十餘名の大歌劇團にて我國最初の試に成功せる歌舞劇
館
二十二日より替る常盤座は
佐藤歳三
新脚色 不如歸 九場
茅野菊子、月岡一樹、小川幸雄、小川瀬織、佐藤俊之助、紋島美佐男、藤村典等の合同大一座
共
通

【図2】浅草初のオペラ集団 大正六年一月二二日（二の替り）（『都新聞』大正六年一月二二日）

【図2】をご覧ください。高木徳子が二二日より常盤座。左側、佐藤歳三「不如帰」、これは芝居です。右上「三」、右下「館」、左上「共」、左下「通」、「三館共通」。三館のどこか一か所チケット代払えば、どこへ行ってもいい、行ったり来たりしてもいいのです。入場料は「階上二十銭、階下十銭」。仮に二十銭で入ったとすると、一座あたりの取り分は六銭。一日五百人入れば大体三十円位の上が

りです。興行主と出演者とで折半したとして、一か月四五〇円。一グループ三十人なら一人十五円。

当時の物価はどうだったでしょうか。夫婦と子供二人で給料は三十円ほどだったといいます。家賃は七、八円。これが大正半ばの日本人の平均的な暮らしです。先程十五円と言いましたが、その頃のオペラ、ステージに立つ人はお金が要ります。暮らしていけない時はどうするか。後援会を作ろうと思ったら、自分でなんとかするしかありません。電話番号の書かれた名刺を配り、舞台終演後、男と逢うわけです。さて男性側（学生）、最初は自分の小遣いで後援会費を払っていられますが、度重なると仕送りだけでは足りない。それを警察が注視、こんな学生がお金を浪費している、と世間に名前が出ると、そのグループは壊滅してしまいます。浅草オペラに近づけば警察が入ってくる、というので、知識人は敬遠し始めます。


歌劇女優番附

【図3】歌劇女優番付　大正8年（『浅草細見』　一九七六）

【図3】は大正八年の女優の見立て番付です。左端の白川澄子は竹久夢二のモデルさんです。右側真ん中一條久子、この人はこの翌年死んでしまいます。「チヤボと言はれて浅草に人気のあつた歌劇女優一條久子事赤岡ひさ（十七）は東京少女歌劇団に加わって京都に出演中流行性感冒に罹つて七日午前七時死去した・・・」（『時事新報』大正九年十一月九日夕刊）。三日遅れの『京都日出新聞』、「歌劇界の人気者一條久子が府立療院内で死亡した 初め乗込んだ京都の舞台へ一度も顔出しをせず入洛早々鉛毒のため入院し間もなく蓮華座へ乗込んだのであつた・・・」。東京の新聞は「出演中」「流行性感冒」と書いているところ、実際は出演せず鉛毒で死んだ、というわけです。一條久子は十七歳です。十七歳で「小結」。オペラ全体は学芸会みたいなものですよね。

音楽の話をいたします。松井須磨子の「カチューシャ」を少しだけお聴き下さい。［CD演奏］伴奏がありませんから音程がフラフ

ラしています、音の長さも、一番と二番とで違っています。今聴くと音楽の態を成していないですが、僕は上手いな、と思うのです。この時代の日本人の音感がどうだったか、ご想像ください。だからこれが大正期最大の流行歌になるわけです。さて、もうひとつ。皆さん、滝廉太郎が明治三二年に作った「荒城の月」をちょっと歌って下さいませんか。【歌唱】はい、ありがとうございます。「花の宴」の「え」に問題があります。滝廉太郎はここにシャープを付けたのですが、後に山田耕筰がこのシャープをカットしてしまいました。非常にいい曲なのに、誰も歌おうとしないから、と。昭和三年の『読売新聞』にちらっと書いてあるので、私はＮＨＫで山田耕筰先生に会った時、これは本当ですか、と聞いみましたら、そうなんだよ、原作者に申し訳ないけれども、私は歌える方がいいと思って、とおっしゃっていました。日本人はこの半音が歌えないということです。オペラにも結構この半音がありますが、歌えないので、他の音に変えてしまうわけですよ。昭和に入って大流行する歌謡曲にもこの半音はありません。

浅草のオペラで歌われた「風の中の羽根のように」などは、みんな帝劇で取り上げられた曲ですが、帝劇のお客さんはこんな歌は歌いません、浅草オペラで歌い崩されて広がったのです。警察が入るほど乱雑な、若い世代が好き勝手なことをしていたらしい浅草オペラ。世間は顔をしかめますが、音楽の上では、これがあったからこそ、流行歌が栄えていくのです。浅草オペラは、日本の大衆芸能にとって、いわば一時代の捨石だったのではないか、と私は思います。

ご静聴ありがとうございました。

（くらた・よしひろ　日本芸能史家）

〈コラム　著作権あれこれ④〉
音楽教室と公の演奏

飯田浩司

音楽教室と日本音楽著作権協会（JASRAC）との間で著作権使用料を巡る対立が生じていることはお聞きになった方も少なくないかと思います。この問題は音楽教室側が原告となって JASRAC に徴収権限がないことの確認を求める訴訟（債務不存在確認訴訟）を東京地裁に起こしており、すでに九月六日には、第一回目の口頭弁論が開かれています。JASRAC は、年額の場合は受講料収入の二・五％を著作権使用料とするなどの改定使用料規定をすでに文化庁に届出ており、来年一月からの徴収を目指していました。今回、音楽教室側がこういった動きに先駆けて待ったをかけたということになります。

では、JASRAC が著作権使用料の徴収を行うとする根拠としているものは何でしょうか？それは、著作権法第二十二条の「著作者は、その著作物を、公衆に直接見せ又は聞かせることを目的として（以下「公に」という。）上演し、又は演奏する権利を専有する」という条文です。音楽教室との関連で、この条文のポイントとなるのは、音楽教室での JASRA 管理楽曲の演奏が「公衆に聞かせることを目的として演奏する」こと（以下、「公の演奏」とします）、にあたるのかどうかというところです。この「公衆」の意味するところについて、著作権法は、さらに第二条六項で不特定かつ多数の者のみならず「特定かつ多数の者を含む」としています。

この点については、JASRAC は、音楽教室は生徒募集の広告で教師による質の高い音楽に触れることを宣伝しており、聞かせることを目的にしており、教室での教師、生徒の演奏はいずれも公の演奏にあたると主張しています。これに対して、音楽教室側は、教室では多くても十人程度の生徒と教師が継続的に練習する場で、特定の少人数を相手にしているため「公衆」には該当せず、演奏目的も「聞き手を感動させるためでなく、演奏技術を学ばせるため」のものであって、公の演奏に当たらないと反論しています。

こういった「公の演奏」の解釈について、裁判所はこれまでにもカラオケボックスやダンス教室の演奏について、「公の演奏」に当たると判断しています。さらに今回問題となっている音楽教室での演奏がこれらと同列に判断することができるものなのかどうか、裁判所の判断が注目されるところです。

（いいだ・ひろし　副音楽館長　本学経済学部教授）

資料受入報告

藤田正典資料を受贈

昨年十月一九日、作曲家故藤田正典氏（一九四六―二〇〇九）の作品資料を受贈した。

栃木県に生まれ、入野義朗に学んで、一九七〇年、「フルート、ヴィオラ、チェロとピアノのための音楽」で日独現代音楽祭作曲コンクール一位を受賞した藤田氏は、同年ベルリン市の奨学金を得て渡独し、ベルリン芸術大学で尹伊桑に師事。「ムジークプロジェクテ・ベルリン」「バンジャールグルッペ・ベルリン」「ＴＯＫＫアンサンブル」に参加して、作品は、ヨーロッパ各地の音楽祭などで広く演奏された。帰国後は邦楽器、打楽器のための作品を多く手がけ、独自のスタイルによる斬新な響きの追求で、高く評価されている。

今回受け入れた資料は、最初期の「しぐれに寄する抒情」（佐藤春夫詞　一九六七）から「打楽器のための〈デフェンシオン〉」（一九七八）、「オーロラ」シリーズ（Ⅰ、Ⅱ　一九七八、Ⅲ　一九八一、Ⅳ　一九八二）、「凪」シリーズ（Ⅰ　一九八〇、Ⅱ　一九八七、Ⅲ　一九九〇）、「オーケストラのための〈輪廻〉」（一九九三）を経て、最晩年の「波紋の彼方より」（二〇〇五）に至る八七点の自筆譜（複写を含む）、作品を収録したテープ十一点などである。

「平吉毅州資料」を新設

二月九日、作曲家故平吉毅州氏（一九三六―一九九八）の資料を受贈、記念文庫「平吉毅州資料」を新設した。

平吉氏は長谷川良夫に師事して東京藝術大学、同大学院に学び、一九六二年、「管弦楽のためのコンポジション」で音楽コンクール第一位、六九年、「交響変奏曲」で第一八回尾高賞を受賞した。管弦楽曲「ヴァイオリンとオーケストラのためのレクイエム」（一九七五）「ギター協奏曲」（一九八〇）、室内楽曲「五つの管楽器のためのエスキス」（一九七〇）「弦楽合奏のためのエピタフ」（一九七二）「八重奏曲」（一九七二）「風の歌」シリーズ（一九七三―八五）などを世に送り、「混声合唱組曲〈ひとつの朝〉」（一九七八）をはじめとする多くの合唱曲で親しまれた。また、合唱曲「気球にのってど

こまでも」（一九七四）やピアノ曲集「虹のリズム」（一九七九）「南の風」（一九八四）など、子供のために書かれた作品によって音楽教育の分野における貢献も大きい。長く桐朋学園大学で後進の指導にあたり、門下から多くの優秀な才能が巣立っている。

受入資料には、代表作「交響変奏曲」をはじめとする管弦楽曲、室内楽曲、合唱曲、独唱曲などの自筆譜およそ六〇〇のほか、出版譜、録音資料、記事掲載誌などが含まれている。

松村禎三資料を返却

昨年一〇月二四日、ご遺族からのお申し出により寄託契約を解除、資料を返却した（二〇一七年三月一六日付）。

日誌から

二〇一六年九月～二〇一七年七月

■二〇一六年

九・三　北海道立三岸好太郎美術館「三岸交響楽〈オーケストラ〉をめぐる人びと」（10・19まで）に資料協力。

一〇・二六　二〇一六年度第三回運営委員会開催（第二回は中止）

一〇・二七　本学経済学部飯田ゼミ見学。

一一・一　館報第五号発行。

一一・一〇　音楽図書館協議会臨時総会出席。

一一・二三　第五回レクチャーコンサート「浅草オペラ―一〇〇年の回想」開催。

一二・二五　冬期休館（一・四まで）

■二〇一七年

一・一一　遠山音楽財団付属図書館編『山田耕筰作品資料目録』（一九八四刊）、販売開始（アカデミア・ミュージックに委託）

一・二五　第四回運営委員会開催。

二・二四　特別展図録『五線譜に描いた夢』（二〇一三刊）、従来の委託先ナディッフに加えてアカデミア・ミュージックでも販売開始。

三・一九　ＮＨＫ「名曲アルバム」に資料協力。
三・二二　第五回運営委員会開催。
三・二八　二〇一六年度第二回収書委員会開催、資料受入等について協議。
四・三　ホームページに所蔵雑誌一覧を掲載。
五・三一　二〇一七年度第一回運営委員会開催。
六・一　ホームページをリニューアル、ＯＰＡＣのＷＥＢ公開開始、館報のバックナンバーデジタル版公開など。
六・三　ＩＡＭＬ例会、演奏会プログラムの収集と整理に関するシンポジウムにパネリストとして出席。
六・二三　音楽図書館協議会総会出席。
七・二五　第二回運営委員会、二〇一七年度第一回収書委員会開催。

編集後記

館報六号をお届けします。◁シリーズ三回目となった「仕事の周辺」は、作曲家で当館収書委員の西村朗氏にご寄稿いただきました。作曲家のアツい夏、どうぞくれぐれもお体大切に。◁「コラム著作権あれこれ」は四回目、今回は論議を呼んでいる音楽教室を巡る音楽著作権の話題です。◁制作にあたり、今回もひとま舎上村様には一方ならぬお世話になりました。ありがとうございました。（七階人）

第六号　二〇一七年一一月一日発行
編集発行人　秋月　望
発行所　明治学院大学
遠山一行記念日本近代音楽館
東京都港区白金台一―二―三七